

私のか・ぞ・く

吉場 朋子

身長148センチ、体重40キロ、これが私の母だ。あんな小柄で、よく3人も子供を生んだと感心する。お産以外に、入院した事がないのが、母の自慢だ。勿論、骨折だって、ねんざさえもした事がない。そんな母が80才を過ぎた頃から、体力が落ちてきた。それは、年令のせいだと思いい、私もあまり気にとめなかった。何しろ元気がある日は、相変らず化粧品のセールスに出掛けて行くのだから…。

ところが、日を追うごとに、昼間もゴロゴロと寝ていたり、今日は一日寝ているからと、床に着く日が多くなった。お医者さんに行こうと、いくら私が言っても、何と言われるかこわいといつて、腰をあげない。やがてひ孫も生まれ、元気が出たのか、孫娘の家にも遊びに行けるようになったが、やはり体力が長続きしない。暮れもおしつまって、甥がや

つてきた。母にとつての初孫である。

「おばあちゃん、いつ迄もグズグズしていても仕方ないから、思い切つてお医者に行きなさい。その結果が出てから判断すれば良いのだから」この一言で母は重たい腰を上げ、年明けすぐにお医者に行った。と云つてもわかりつけのお医者さんがなかつたので、友人のたか子さんに相談した。彼女はピアノの生徒のお母さんでもあり、自身も私の生徒、そして私にとつては年の離れた信頼できる妹のような存在なのだ。

早速、おじいちゃんが車で迎えに来て下さり、医者に連れて行つて下さつた。個人医院なので、簡単な胃の検査などして頂き、しばらく通院して、お薬を飲むうちに、再び元氣になった。一安心したのもつかの間、快食、快眠、快便だった母が、10日程便が出ないとの事。又先生の所へ、何と腸閉塞という診断で、その日のうちに国立病院を紹介され、即入院、手術となった。そして検査の結果、大腸ガン、肝臓ガンが発見され、余命半年と宣告されてしまった。

私が小四の時、父母は離婚、それ以来女手一つで、私達姉弟を育て、

自分の母を見送り、ずっと働き続けていた。おまけに弟は29才という若さで幼子2人を遺して病死、姉は赤ん坊の時に亡くなっている。私一人で母を看ることになる。弟が亡くなった時点で、そんな覚悟はとつて出来ていた。いつかは母と別れる時が来るとは、ボンヤリと解つていても、いざ半年と言われても実感が無い。いくら入院しているとはいえ、頭もしっかりしているし、普通に会話もできる。本当にそんな日が現実によつてくるのだろうか。私は自分の仕事を辞める訳にもいかず、又、母が長年培ってきた仕事も出来る限り続けて行こうと決めた。

勿論、たった一人では何も出来ない。そこで、私の周りにいる生徒のお母さんや、友人達が自発的に協力を申し出てくれた。

たか子さんは方向音痴なのに、暑いさ中、毎日、自転車で2キロ強の裏路を覚えて、私にお弁当を持って、病院に通つて来てくれる。

由美子さんは、私がレッスンに出掛ける土曜日に、やはり自転車で母のお昼の手伝いに走つて来てくれる。

他の友人達も、仕事の合い間や帰りに立ち寄つてくれて、いつも母の

ベットの周りは賑やかである。

母にとって孫娘のような可愛い看護師さん達とも、たちまちお友達になり、病院に在るといふよりは、大家族の中にいるような日々が続く。83才の母にこれ以上辛い思いをさせたくないのです、抗ガン剤も延命治療もお断りし、静かにその日を迎えさせてやろうと甥と姪と3人で相談して決めた。

一度、心臓の働きが悪くなり、他の科へ移されたが、それもすぐに治まり、又外科へと移った。何様（？）の移動と思える程、外科から何人も看護師さんが、お迎えに来てくれて、母はとっても嬉しそうだった。

年令の割に、ミーハーの私の影響で、若い人と話も合う。「別に用ないけど、のぞきに来ただけ」なんて来る看護師さん、母も彼女達に「よく寝てきた？　ちゃんとごはん食べてきた？」なんて聞く。本当にこの人が半年たったら、この世からいなくなるのかと思う程。私は別に開き直っていた訳ではないが、母に悟られないよう平常心を心がけ、一分でも一秒でも母の傍に居る事が、私に出来る最後の親孝行と思っていた。

病院からの帰り、バス停を一つ手前で降りて、銭湯に寄る。私の若い友人の実家。そして、ここにも私を暖かく迎えてくれる人がいる。番台にいたのは、彼女のお母様。

「お帰りなさい。ご苦労さんでした。」この一言で、私の心の糸がほぐれ、汗と涙をお湯で流す。家に帰れば、一日中の家事をこなし、寝るのは12時すぎ、翌朝5時には起床して、朝ごはんを食べないで待っている母の許へ。これが日課だった。

足かけ三ヶ月目に一時退院する事に。

今度具合が悪くなったら、それが最期だから、必ず救急車でこの病院に来るようにと言われた。母はすっかり治ったと思っていたらしいが。退院の日も、かつての生徒で、今は大学の研究室にいる美弥ちゃんが、自分の車で迎えに来てくれた。退院の手続きをすませている間に、テキパキと病室をきれいに片付けてくれた。私は再び母がここに来る日が一日でも遅くにと念じながら、帰宅した。

帰りの車の中でも、母はご機嫌で、

「美弥ちゃんは、運転がお上手ね」と言えば、彼女も「おばあちゃん、苦しくない？痛くない？大丈夫？」と気を遣ってくれる。この2人以前から結構仲良しで、彼女がまだ中学生の頃、ママとケンカして、家出してきた事がある。昼間は、私がいらないのを承知で、母と2人で何時間かすごして、夕方帰って行ったそう。この時2人の間でどんな会話があったのか、未だに私は知らない。昼食も2人で分けあつて食べていた。本当の祖母と孫娘のように。

帰つて来ても、私は四六時中、母の傍にいる事は出来ない。ヘルパーさんをお願いしようと言つたが、知らない人が家に来るのは、気を遣うので、いやだと言う。あなたのお友達の方が余程いいなんて虫の良い事を言う。かくして又々私の友人達が交代でやってきてくれる。鍵の場所を決めて、自由に出入りしてもらつた。

母の傍で、会社の資格試験の勉強をしていた森ちゃん。お米とおでんを差し入れてくれた良子さん。母の好物の太巻きずしとプリンを必ず買って、立川からきてくれる幹子さん。遠方なので、来られないからと、

お米を送り続けてくれた久子ちゃん。自身もお姑さんがいるのに、一度でも多くお母さんの顔がみたいと来てくれる幼なじみのあや子ちゃん、近所だけでも突然やってきて、母を喜ばせる清子さん。仕事帰りにお店のおそばを届けてくれる美恵子さん。血のつながっている娘は私だけだが、母には、大勢の娘や孫がいた。

だが病魔は確実に、母の体内で増殖し、目に見えて、食欲も減り、私を作る料理もくさいと言いつい出し、私は台所で立って食事した。

手術後、ストマー（人工肛門）を装着しているので、日に四、五回洗浄する。トイレにも一人で行かれるが、夜中は足許があぶないので、必ず起してねと言って布団に入るが、2時間おきに起される。母がもうすぐ亡くなるという現実感や悲壮感を味わっている時間はない。とに角、私が倒れないようにとそればかり、気を強く持つて過ごす日夜だった。肝臓ガンが痛み出したらしく、背中が痛いと言いつい始めた。二つ並べて敷いていた寝床もいつしか母と同じ布団で寝、背中を一晚中さすり続けて眠るようになったある晩、母が言った。「これ以上、あんたに迷惑かけ

たかないから入院するワ」「お母さん、入院したら、お正月まで帰ってこれないよ。それでもいいの?」「いいよ、救急車と孝子さんに来て貰って……」。又無理をお願いして、孝子さんに来て貰った。その日から四日後、大して苦しむ様子もなく眠るように母は、息を引きとった。

病院から渡される書類、次々とこなさなければならぬ沢山の事、泣いている暇はなかった。一晚だけでも家に連れて帰ろうと寝台車を待っている間に、葬儀屋さんと打ち合わせ、良子さんには一足先に家に戻ってもらい家の片付けをお願いした。

寝台車で家に帰る時も、母が大好きだった孝子さんが同乗してくれた。家には友人や知人がすでに集まってくれ、仮通夜というよりは、賑やかな一夜となった。母は人が多勢集まって賑やかなのが大好きだったから、多分喜んでいただろう。葬儀までの3日間、斎場に預かっていただく為、翌朝、母は近所の方々に見送られ一足先に出発した。

そして、又々、女ばかりの通夜と葬儀が行われた。生徒達も来てくれた。中でも近所で赤ちゃんの時から、母が可愛がっていた春チャンは、

お通夜の後、シヨックで寝込みお葬式にも来られなかった。中二の少女には耐えられなかったのだろう。

葬儀に来て下さった母の知人が、「随分お若いご親戚が多勢いらっしゃるのですね」と間違える程、83才のおばあちゃんの葬儀とは思えなかったのだろう。

血はつながってはいないが、母と私には、大勢の家族がいた。その皆様の強い絆とご尽力で、母は旅立っていった。まさしく、これが私達母子の家族力なのである。

あれから7年、その家族力に支えられ、今も私は、独りで元気に生きています。

今年も沢山の年賀状をいただいた。その中に

「やさしくて、楽しくて朗らかな吉場さんのおばあちゃんに、この賀状で毎年つないで貰っているようで、とても嬉しいです。」あの時お世話になった看護師の美映ちゃんからの物である。母はあの世に行ってもまだ他人さまに喜んでいただけ、何と倅せ者なのだろう。